

主論文要約

博士論文の論題名：

Cosmos and Cosmopolitanism: Vehicles for William Faulkner's American South

(コスモスとコスモポリタニズム——ウィリアム・フォークナーのアメリカ南部)

著者名：

山根 亮一

20 世紀アメリカ文学史の中で、William Faulkner ほど地域主義を際立たせながら世界的に受容されてきた作品を書いた者はおそらくいないだろう。彼より一世代前の地域主義作家 Sherwood Anderson から、故郷であるアメリカ深南部はミシシッピーを題材として小説を書くことを勧められた Faulkner は、後にその場所を、ないしはその歴史を、無尽蔵な美学的源泉だと認識した。1949 年にノーベル賞作家となった彼がその輝かしいキャリアを振り返る頃には、自らの作品群を「私の小宇宙 (“a cosmos of my own”)」と呼び、その中で彼が構築した虚構の共同体「ヨクナパトーフア群 (Yoknapatawpha County)」は、彼の地域主義を濃密に表現するための舞台となった。そして 1962 年に彼がこの世を去って半世紀が経つ間に、「小宇宙」は広範に伝播した。Jean-Paul Sartre にその才能を認められた Faulkner の表現形式は（米国やその他の国々で評判が高まるのは、フランスでの人気を介してのことである）、主に Gabriel José García Márquez, Édouard Glissant, そして Salman Rushdie らグローバル・サウスの作家たちに影響を及ぼしたことでよく知られている。

こうした Faulkner を 21 世紀的な視点から再構築するために、David Harvey の *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom* (2009) が有効な補助線となろう。ここで Harvey は、Immanuel Kant のコスモポリタニズムの基盤となる地理学と人類学に焦点をあてながら、ネオリベラリズム的なグローバル社会（又は、Harvey の言葉を借りれば、資本主義と帝国主義を含意するグローバル化という概念）に対する批判を展開した。その際、彼が参照したのは勿論 Kant だけではなく、Martha Nussbaum, Ulrich Beck, and David Held を経て、Boaventura de Sausa Santos が提唱する「サバルタン・コスモポリタニズム (subaltern cosmopolitanism)」にまで至る。グローバリズムの流れの中で全世界規模に渡って抑圧されるサバルタン、そのローカルな声を増幅させることが自らの使命だと考える Harvey は、地理学的な知識こそがその重要な鍵になると考えた。本論文は、まさにこの視点に対しての文学的な回答となることを目指している。果たして、文学はどの様に、ネオリベラリズムに回収されやすい従来のコスモポリタニズムのキメラ的な性質を免れながら、尚且つ、Harvey の構築する地理学的コスモポリタニズムを補強することができるだろうか。こうした問いに取り組むために、Faulkner をめぐる全世界的な地域主義の系譜の中で、この論文は他の場所、他の作家に言及することから始めたい。

それは、日本の中上健次に他ならない。とある講演で、彼がヨクナパトーフアの地図——それは 1936 年の小説、『アブサロム、アブサロム！ (*Absalom, Absalom!*) 』で初めて地図

化された——について、その図面上に広がる鉄道の直線に着目したことは、本論文の骨子を形成するための重要な着想を提供する。中上はその鉄道から拡散する様々な乗り物（馬車、自動車など）を想像し、それらを「繁茂する交通機関」と呼んだ。この表現は、ヨクナパトーフア地図上にある鉄道による共同体の形成を、Faulkner の好む文学的素材の一つであるスイカズラ（“honeysuckle”）の繁茂に喩えたものである。中上の述べる「繁茂する交通機関」は、まるで植物が繁茂するように増幅するキャラクター達の声へと繋がり、結果的に「繁茂する南部」を幻視させる。その「繁茂」は、中上作品の主な題材である紀州の部落を美学化するための種子となった。Faulkner が「ヨクナパトーフア・サーガ」を創造したのに対し、日本では中上が「紀州サーガ」を創造したのである。

「繁茂する交通機関」が指し示すアメリカ南部人のポリフォニーは、おそらく中上本人が意識した以上のものを含意している。英語では、メタファーを構成する二つの要素を **tenor** と **vehicle** と呼ぶが（“Life is journey”という文の場合、**tenor** が“life”、**vehicle** が“journey”となる）、交通機関そのものに **vehicle** の役割を与え、Faulkner の描く南部人の声を代弁させたのは、中上が初めてだろう。そしてこのことは、コスモポリタニズムの言説において大きな効果をもたらす。何故なら、「地図上の交通機関＝小説内の人間の声」という仮説が成立するのであれば、前掲した Harvey の提唱する地理学的なコスモポリタニズムに対し、より動的な視点を付与することができるからである。Harvey は、グローバル社会に於けるデラシネ（根なし草）的な主体はネオリベラリズムの育成条件だと述べた。この場合、「自由」は単独行動主義的な、コロニアルな支配のレトリックとされる。しかしながら Harvey のこの対抗的な態度は、地域に根差した視点を優先するあまりデラシネの不安定さを後景化させることで、彼本人が批判した Kant の差別主義に自ら陥る可能性を孕んでいる。「適切な」地理学的知識なしでは、彼の目指すコスモポリタニズムは達成できないとする Harvey の態度は、Kant のそれと同じく、全ての人間がコスモポリタンな権利を有するとは限らない、ということの意味し得るはずだ。「適切な」という部分を詳述すれば、それは Newton、Descartes、Kant、Einstein、Gottfried Leibniz、Henri Lefebvre、そして Harvey 本人の地理学的概念を相対化させながら学ぶことでようやく得られる地理学的知識に連結される。とは言え、この様な厳めしい面々に囲まれてはじき出される解答が一体どれだけサバルタンの声と一致し得るのか、という点については疑問が残る（この 7 人の権威に迫られたら、サバルタンが余計に押し黙ってしまうに違いない）。根なし草の様な人間を抱擁するには、地理学的な知識だけでは、それが如何に「適切」であろうとも、又はその「適切さ」の示し得る固定概念故に、不十分である。

その一方で、中上の示した「繁茂する交通機関」というメタファーは、それと共感関係にある者たちの声と併せて、ある地域に根差しながらも移動する主体の両価性を指し示す。この両価性を見つめることは、サバルタンの経験と寄り添いながら、Harvey のコスモポリタニズムを補充するための端緒となるかもしれない。この推察をより具体的に言い換えれば、実際には中上の着想のみに基づいて地域主義作家 Faulkner のコスモポリタニズムを定義

するのは困難なのであるが、ポストコロニアリズムを経た現在の文学批評史に於いて中上の論理（交通機関の機能に登場人物の声を託すという隠喩）の支えを見つけるのは、以下に示す様に、それほど困難なことではないのである。

文学に於いてデラシネとは必ずしも悪いことではない。ポストコロニアリズムの言説に於いては、Homi K. Bhabha が「散種するネイション (“DissemiNation”）」という鍵語を用いて、近代的な移民社会に於ける想像の共同体について述べている。とりわけ、彼のメタファーについての概念はこの論文にとって示唆的である。metaphor の語源である「移動 (“transfer”）」に着目した Bhabha は、移民たちにとって失われた故郷という空白を埋めるために「ネイション」が在るのだと考えた。それ故「ネイション」は散種するのである——文字通り、地理的にも時間的にも遠い過去を、移民たちの想像の共同体として表出させながら。「想像の共同体」とは元々 Benedict Anderson の用いた言葉であるが、それが内包するナショナリズム的なニュアンスから距離を取るために、Bhabha は (Anderson がそうした様に) グローバルな印刷資本主義の構造ではなく、メタファーそれ自体が含意する移動の概念に注目したのである。Bhabha が示す想像の共同体、「散種するネイション」は、様々な点で中上の「繁茂する南部」と相性が良い。何故なら、第一に、それらの空間はメタファーの産物であるという認識を強調しているから、次に、それらの空間に於いて定住と移動という両価性を表現しているから、そして最後に、その空間に付与された可動性故に、世界的な視野を提供しているからである。文学的言語とは、本質的に「移動（または隠喩）」するものなのであれば、それは、我々に地域に根差しながらも世界市民的な存在であることを認識させようとする地理学的コスモポリタニズムにとって、必要不可欠な過程を照射するだろう——「ローカル」と「グローバル」とが繋がっていく過程を。

本論文は、中上の「繁茂する交通機関」というメタファー、そして Bhabha の「散種するネイション」という概念から着想を得て、Faulkner の地域主義を世界市民的視野から見つめなおす。換言すれば、それは彼の「コスモス」を「コスモポリタニズム」と接続する試みである。その際に、とりわけ Bhabha、Paul Giles、そして Jonathan Arac 達が提供するポストコロニアリズムの視点は、深南部に於ける Faulkner の語り手としての主体位置を再考するのに有効になる。彼らの学術的達成は、Faulkner の地域主義作家としての立場をより広範な視野から捉えなおすための重要な視座を設定する。そこから見直される「繁茂する交通機関」——彼の小説内に於ける馬車、鉄道、自動車、飛行機と登場人物との関わり——は、この作家のデラシネ的な地域主義、または、彼の描くアメリカ南部が内包する定住と移動、またはローカルなものとグローバルなものの両価性を紐解いていくための文学的装置だ。

勿論、この議論の中では Faulkner のみを射程に入れる訳ではない。Gertrude Stein、T.S. Eliot、F. Scot Fitzgerald 等のモダニスト、そして Thomas Dixon Jr. や Flannery O’Conner 等のアメリカ南部の地域主義的な作家群にも言及する。が、それでも Faulkner に焦点を絞る理由は、本論文が——例えば Hugh Kenner が、Eliot や Faulkner を含むアメリカン・モダニストの作品に見られるヨーロッパ芸術の影響、またはそれらの間テクスト性から「地

元生産式コスモポリタニズム(homemade cosmopolitanism)」を見出したように——新たなコスモポリタニズムの総体を発掘することに関心が無いからである。別の言い方をすれば、Harvey が地理学に根差した形で整理しなくてはならない程、もはや地に足の着かなくなつた（既に種々雑多に存在する）コスモポリタニズム「ズ」を更に多様化するよりも重要なことが他にある、と信じるからである。そのことが、様々な作家の別々の世界観ではなく、一人の作家が提供する世界観における内的差異や両価性に惹かれる理由を説明する。

「そのこと」とは、文学そのものの一機能と関連するのだが、「ローカル」と「グローバル」とを架橋しながら、その融合を遅延させることに他ならない。又は、この二つの相反する空間的概念を混在させることの結果ではなく、その過程を強調すること、とも言えるだろう。一見曖昧に見えるこの態度は、1995 年の「フォークナーとヨクナパトファ学会(Faulkner and Yoknapatawpha)」に於いて、Sacvan Bercovitch が述べたこと——ある学術領域が指し示す包括的な回答に対して、固有の物語を通じて疑いを差し挟むことが文学の役割であるという提言——によって支持されるだろう。彼が述べる様に、文学とは絶えず既存の知識体系の再考を誘うのであれば、あらゆるものが「デラシネ」に思えてくる。例えば、それが個々人の主体位置やアイデンティティーであっても。Tobin Siebers がアメリカのアイデンティティー政治の繁栄は、同国の文化がナルシストの文化であることの証左であると述べたとき、人種、性差、階級といった文化政治における「三種の神器」は脱神話化された。その代わり鮮明になったものは、Walter Benn Michaels が述べた様な、言語を通じてアイデンティティーを物象化したいという自己充足の不可能な欲望である。

ここで、Michaels が Faulkner の『響きと怒り(*The Sound and the Fury*)』(1929)のその議論の端緒とし、多民族化した 1920 年代アメリカのモダニズムに内在するネイティビズムの欲望を指摘したことは注目に値する。Harvey にとっては、コスモポリタニズムの言説を地理学的に補強すること、世界市民主義が地域主義と融合することは彼の反ネオリベリズムにとっての正義なのであるが、Michaels が提供した文学的視点から言えば、その正義は自らの存在を地域に根差したいというネイティビズムの欲望と隣り合わせなのである。もっと言えば、その欲望は、奴隷制時代のアメリカ旧南部を夢想する Faulkner 作品に於いては、人種主義を引き起こす要素にもなる。この点から見ても、文学にとって、地域に根差さないデラシネであるということは必ずしも悪いことではない。Faulkner は、アメリカ南部の地域主義が正当化する人種主義と、その人種主義を否定する普遍的な人道主義を、和解させずにそのまま緊張関係に置きながら提示している。端的に言えば、「ローカル」と「グローバル」を敢えて矛盾した形で並列させるのだ。この矛盾こそが、もしそうしたものをここで定義して差し支えないのだとすれば、Faulkner 作品の示す文学的な正義と言ってよい。ここで再び Bercovitch の言葉に依拠するならば、文学とは「再考の誘い (“an invitation to recommence”）」であり、それ故、絶えず語り合うための媒体なのだから。

ここで言うデラシネとは、単にネオリベリズムが示す他者抑圧的な自由主義のエージェントではなく、世界市民的な想像の共同体を形成するためのメタファーの機能を示す。再

び Bhabha の議論に言及すれば、デラシネにとって失われた故郷を埋め合わせるものがメタファーとしての「ネイション」、又は想像の共同体なのであるが、Faulkner にとってそれはアメリカ旧南部の記憶と不可分だ。しかしこの小説家の場合、その地域についての説明を登場人物の誰かの言述にそのまま託してしまえば、Michaels がそうした様に、その言葉は人種差別的なネイティビズムの欲望に直結させられてしまう。そうでなければ、せいぜいのところ、その登場人物が属する特定のアイデンティティー・グループの政治的な (Siebers にとってはナルシストな) 企図に貢献するに留まらざるを得ない。

しかしその一方で、メタファーにその言葉を託すのであれば、そのデラシネ的な性質故に、ネイティビズムの欲望から解放され、彼の地域主義はより普遍的な視点から再考されるかもしれない。中上がおそらく直感的に表現した様に、そのメタファーの機能は Faulkner の描く「繁茂する交通機関」によって具現化されている。これから提示する五つの小説は、それぞれの仕方で、作品内の様々な交通機関とその乗組員 (又はそれを描写する登場人物) たちの共振関係を例証する。ここでは、乗り物の特徴や動きが様々な主体位置にある登場人物の声を代弁し、それらは語り手の言えないこと、地域的な価値観によってタブー視されること、を具現化している。彼の「コスモス」における輸送メディアと言語メディアの同化、又は、交通機関とメタファーとしての多義的な vehicle に注目することは、Faulkner の地域主義を内部から脱構築しながら、結果として、彼なりの「コスモポリタニズム」を照射することに繋がるだろう。地理学では理解し得ない文学的価値観、その不可知論的な美学を、コスモポリタニズムの言説に介入させるだろう。

Faulkner 自身が、ヨクナパトーフア・サーガの始まりは *Sartoris* (1929) という小説からであると定義したこと、そして彼が創作したヨクナパトーフアという架空の共同体が *Absalom, Absalom!* において地図化されたことが、この論文の射程を決定する。各章はこの期間の時系列を元に構成されている。*Sartoris* (これは編集されたヴァージョンであり、*Fangs in the Dust* という原文は 70 年代に死後出版された)、*The Sound and the Fury* (1929)、*Light in August* (1932)、*Pylon* (1935)、そして *Absalom, Absalom!* (1936) について議論する 5 つの章は、どの様に Faulkner が地域主義的視野からコスモポリタンな視野を構築していったかを追跡している。端的に言えば、世代間や兄弟間を繋げる血族的な共同体 (*Sartoris, The Sound and the Fury*) から始まり、深南部という人種主義的な地域の共同体 (*Light in August*) と、反対に地域性の曖昧化されたニュー・オーリーonzを舞台とした共同体 (*Pylon*) を介して、最終的には奴隷貿易の記憶を通じて広がる全世界的な共同体 (*Absalom*) へと繋がっていく。これらの物語に於ける登場人物達は、交通機関という共通分母を介して、それぞれ自意識的な共同体概念を示しながらも、総じて、それらの概念の不完全性と共に他者への連帯意識を表現している。

各章の要約に入る前に、以下のことを付け加えたい。前述した様にヨクナパトーフア・サーガの始まりは 1929 年の小説、『サートリス (*Sartoris*)』からであると Faulkner 自身が述べたことは本論文の出発点を設定するものの、そもそもその作品自体は「始まり」ではな

い。『サートリス』は、『埃にまみれた旗 (*Frag in the Dust*)』という長編の編集された一つのヴァージョンであり、その元々の小説が完全な形で出版されたのは、作家の死後十年以上経ってからのことだ。つまり、「コスモス」の実際の「始まり」は、後から現れたことになる。意義深いのは、この編集の事実を Faulkner 自身が特に気にせず、とにかく『サートリス』を「コスモス」の原初に据えた態度のことである。この柔軟な態度が、遡及的に構築される想像の共同体としてのヨクナパトーフア、または「私のコスモス」の特徴を端的に説明する。メタファーの構造からこれを説明すれば、「コスモス」という vehicle は実は元々無かった tenor の空白を埋めるもの、ということになる。その意味で、中上の述べた「繁茂する交通機関」は、Faulkner のアメリカ南部について表現しながらも、実はその根拠の無さ、デラシネ的主体位置を覆い隠すために繁茂している、と言えるだろう。この遡及性と脱中心性は、以下に挙げる Faulkner 小説に通底する傾向となる。

第一章： Echoes of Silence: Old Bayard's Disability Aesthetics (42～75 頁)

そしてその「始まり」では、Bayard Sartoris II という登場人物が Faulkner の描くアメリカ南部の存在不安を体現している。衰退する旧南部的な価値観を、サートリス家の伝説を語ることで永らえさせようとするのがこの登場人物である。しかし、ヨコナ（この時はまだヨクナパトーフアという名前ですらない）という共同体に於いてサートリス伝説を構築する Bayard の身体には、語りの不安が刻印されている。難聴の老人として造形されている彼には、「壁」のメタファーが付与され、そのメタファーによって閉じられた空間でのみ、自己充足的なサートリス伝説の真正性が担保されているのだ。その一方で、顔に出来上がる腫物は、彼の体が弛まぬ時間の流れにあることを意識させる。時間の流れから身を閉ざすための難聴、そしてその流れにあることを否応なしに意識させる腫物——この様に両価性を示す身体を、Faulkner は様々な交通機関に乗せることで、他者へと接続させるのである。物語の中盤、Bayard は同姓同名の彼の孫、Bayard Sartoris III の運転する自動車の中で息を引き取ることで、サートリス家の物語が引き継がれる（物語の後半は、Bayard III が飛行機事故で死ぬまでを描く）。ヨクナパトーフア・サーガの「始まり」に見つかるこの登場人物の造形は、Faulkner の物語形式を理解するのに重要な基盤となる。

この章では、Tobin Siebers の身体障害理論を基盤に Bayard II の両価的な身体を読み解く。何故ならそれは、この登場人物の身体と、Faulkner のアメリカ南部という共同体とを接続するのに最も有効な理論だからだ。文学の領域に於いて、1990 年代に様々なマイノリティー・グループによるアイデンティティ政治が繁栄すると共に、身体障害者の理論が構築され始めた。アメリカ文学の文脈では、Rosemarie Garland Thomson の *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature* (1997) が正典の一つとされている。Siebers は Thomson の身体障害理論を踏襲しながらも、身体障害者のナルシシズム（障害を抱えているという理由で特別な権利を受けられる、という自己中心的な発想）、またはそうした発想に対する批判を回避しようと試みる。その過程で Siebers

は年齢を重ねて衰えていく身体を自らの理論（人種、性差、階級に関わりなく誰もがいつかは障害を抱えるであろうという理論）の下敷きとした。障害を抱えた身体と普通の身体を理論的につなげることで、Siebers は多くのアイデンティティー政治が陥りがちな本質主義を免れるのである。この脱・アイデンティティー政治的な態度は、Bayard II の地域主義的なナルシシズムを解体するための鍵となる。アメリカ南部を神話化する彼のナルシシズムを、身体障害理論の視点から脱構築することで、本論文はある特定のアイデンティティー政治には寄与しないという普遍的な態度を獲得できると共に、地域主義の枠内に囚われることなく Faulkner のアメリカ南部を見つめることができる。この態度が、Faulkner 的なコスモポリタニズムへと向かうための必要条件となる。

第二章：“Dar Mr Jason Car”: Persons in Transition in *The Sound and the Fury* (76～98)

『サートリス』（又は『埃にまみれた旗』）に於いて世代間を繋げる交通機関は、『響きと怒り』では、兄弟間の接続のために再利用されている。コンプソン家の兄弟たちがそれぞれ独立した語り手であると考えられているこの小説は、その兄弟たちが接続し合う構造によって成立している。Benjy、Quentin、そして Jason の三人は、自らの語り手としての存在不安を暗示しながら、それぞれの非・自己充足的な言語を通じて（自らの視野の限界を露呈しながら）、他の語り手と接続する。それ自体では定義不可能であるという言語の性質は、Barbara Johnson が主張した決定不可能な言語のループによって説明されるだろう（ある言葉の定義を探る場合、いつまでも別の言葉の定義へとその根拠を求めなくてはならないという脱構築主義的ループ）。そして、言語を扱う以上このループを避けられない語り手の不安は、彼らが自らの独白に於いて隠ぺいしようと努める一方、その独白の中で「繁茂する交通機関」によって暴露されている。

端的に言えば、この物語では、まるで言葉がそれ自体の定義に永久に到達できないことを示すかのように（語り手の言葉が脱構築主義的ループにあることを示すかのように）、語り手の乗る交通機関は機能不全に陥るのである。Benjy の乗るおんぼろの馬車から始まるこの小説は、列車や自動車など様々な乗り物の煩雑な往来で混乱する Quentin の意識へと繋がり、目的地へ到達する前に動かなくなる Jason の自動車へと向かう。この最後の語り手と停止した自動車を発見するのが一家の黒人召使 Luster であり、彼がそのとき発した言葉が「あそこにジェイソンさんの車があるだ “Dar Mr Jason Car”」である。人間と乗り物とを接続させるこの発言によって、Faulkner は語り手たちの自己充足的には定義不可能な言葉と、彼ら自身の不安定な主体位置を端的に説明する。即ち、Johnson が示す様な言語のループ上にある彼らは、他者と繋がることなしには自らの語りが意味を成さないという存在不安を抱えている。

人間と乗り物を接続する物語とはつまり、人間と言葉を繋げる物語とも言える。生身の人間ではなく、あくまで書かれた存在としての語り手たちは、移動し接続し合う交通機関と同格なのである。この自己定義の不可能性に於いて、Faulkner は、前の小説とは別の仕方

再び、本質主義的なアイデンティティー政治のナルシシズムを無効化している。最終的には、この小説の最後の語り手である Faulkner 本人もまた、コンプソン家の語り手と同様に、他者へと接続されることで初めて意味を成す語り手であることが示される。Paul Giles によると、アメリカ南部研究は Faulkner を南部人作家として固定概念化しがちだが、それはこの物語を読む限り不可能な態度だ。それは、人間＝言葉という公式に於いて、この作家が、他の語り手達と同様、アメリカ南部という枠内だけでは定義不可能なデラシネであり、その枠組みを超えた他者との連帯を願う語り手であると自己言及しているからである。

第三章：“A Body Does Get Around”: The Long 1920s of the Southern U.S., or, Nativist Modernism in *Light in August* (99～126)

とは言え、交通機関、そしてメタファーの一要素としての vehicle によって形成される Faulkner の想像の共同体は、これまでのところ、家族という最小単位の共同体の中でしか機能していない。しかし Faulkner はその共同体を、1932 年の小説、『八月の光 (*Light in August*)』で、ヨクナパトーフアにとっての他者、Joe Christmas と Lena Grove という二人の旅人を描くことで拡張させている。しかし、こうして家族から地域社会へと語りの範囲が広がるとき、Michaels が主張した『響きと怒り』におけるネイティビズムはどの程度その足跡を残しているのかという疑問が浮上する。Michaels の議論は、1919 年から 1929 年までの限定的なアメリカの時代背景をその基盤にしていたが、しかし Faulkner が作家として最も多産であったのは、ざっと言えばむしろ 1929 年から 1939 年の世界大戦間期である。そこでこの章では、Michaels の議論を補完しながら、Faulkner の「長い 1920 年代」という視点から『響きと怒り』と『八月の光』との間でみられるネイティビズムの変化を追跡する。その変化は、Michaels が着目した Faulkner の同語反復的な発話だけではなく、上述した二人の登場人物の旅に焦点を当てることでも明確になる。Lena と Christmas の旅を通じて Faulkner は、本質的には決定不可能なその文化アイデンティティーを人種主義で固定させようとするアメリカ南部を提示する。その際、1929 年の小説が描いたような家族間における血の繋がりではなく、今は困難でもいずれは改訂可能な社会的構築物としての共同体の繋がり、または人種主義が強調されるのである。

物語は、Lena の旅から始まる。彼女はアメリカ南部の八月の熱気を緩和するためヤシの団扇を持って、あるときは馬車に乗り、またあるときは徒歩でヨクナパトーフアに辿り着く。ヤシの葉を持って旅をするという行為が、彼女の旅の文化的意義を特徴づける。というのもこの植物は、アメリカ建国期の文化政治においてアメリカらしさを表現する重要な媒体であったからだ。英国の文明を引き継ぎながらも、英国との違いを示さなくては国家的アイデンティティーを明示出来なかった初期アメリカの文化領域では、絵画等によってヤシの木などの南部らしい植物を描くことでその主体位置を形成しようとした。南部らしさがつまり、アメリカらしさだったのである。この文脈に於いて、Lena がこのヤシの葉を団扇として携帯しながら旅することは、1930 年代には失われた（大地から切り離された）アメリカ

らしさ、南部らしさを示している。

その一方で Joe の旅では、文化アイデンティティーを血の論理によって取り戻そうとする人種主義的共同体が示される。移動する Lena のヤシの葉が示す不安定な南部らしさ、アメリカらしさは、Joe の決定不可能な人種と連動するのであるが、Joe の旅の場合は、Lena の様な平和な旅は許されない。何故なら彼は自らの曖昧な人種的アイデンティティー故に、人種主義的共同体の不安だけでなく暴力性をも刺激するからだ。彼は自らの曖昧な人種性を通じて、文化アイデンティティーが如何に不安定であるかを隠ぺいしたがるアメリカ南部共同体の欲望を暴くのである。以上のことを比喩的にまとめると、Lena と Joe の旅は、喪失したアメリカらしさ、南部らしさを示すための vehicle における二つの車輪と言えよう。

第四章：Look at the Sky: Homemade Cosmopolitanism in *Pylon* (127～156)

『八月の光』という物語に執着する「血」と「地」、又は race と place の接続は、『標識塔 (*Pylon*)』の中でこの上なく曖昧になる。この 1935 年の小説は、4 年以上に渡る『アブサロム』の執筆に行き詰った Faulkner が息抜きとして書いたと言われている。友人であった映画監督 Howard Hawks の助言もあって、その舞台はヨクナパトーフアから離れ、ニュー・オーリーonzのマルディ・グラの時期に行われる航空ショーに設定された。これまで馬車、鉄道、自動車について触れてきた Faulkner は、この作品ではより近代的な輸送媒体、飛行機を主に描いている。その乗り物は、Faulkner が構築してきた地域的な物語を自ら脱構築するための vehicle と言えるだろう。何故なら、この作品ではニュー・オーリーonzらしさが徹底的に曖昧化され、その代わりに定住地を持たない旅人の姿が強調されているからだ。『八月の光』におけるデラシネ的な存在論との関連を見せながら、『標識塔』は匿名の新聞記者と地方巡業の曲芸パイロットたちについて語る。前作と異なるのは、この 1935 年の小説に於いて、Faulkner が地域性や人種性を曖昧にすることで普遍的な人間存在を描いている点である。その地理的な曖昧さから、ノーベル賞受賞時に彼が行った 1950 年のスピーチに繋がる様な、普遍的な人道主義のヒントが見つかる。この視点は、James B. Carothers が提唱するノーベル賞のレンズを通じて Faulkner 作品を読む、という姿勢に由来している。そして本論文全体の構成から言えば、この章はこれまで論じられてきた閉鎖空間としての Faulkner のアメリカ南部を解放するための役割を担う。

ノーベル賞受賞の際に彼が発した言葉、それは「永らえる (“endure”）」という語である。この言葉が、『標識塔』における普遍的な人道主義を照射する。物語中、飛行機事故で死んだパイロットへと手向けられる花輪が、匿名の新聞記者の記事によって文字化されるとき、その喪失の記憶は物語形式の差異を超えて永らえる。この新聞記者はロマンティックな書き方に固執する故に編集者から能無し扱いされるのであるが、飛行機事故の後には、友の死亡記事を二種類の書き方に分裂させる。一方は、「文学の始まり」と小間使いの少年が呼ぶものであり、それはゴミ箱の中で見つかるものである。そして他方は、編集者の机に置かれた客観的な記事で、一切のロマンティシズムを排除した形式で書かれたものだ。しかしそのど

ちらにも、花輪は言及されているのである。喪失への追悼を示す花輪は、失ったものの記憶を永らえさせるためのサインでもある。

1930年代のアメリカの空で失われたもの、それは「空の時代（“Aerial Age”）」とも呼ばれた1920年代の浮かれた気運（“airmindedness”）である。飛行機の発達やニューヨークの超高層ビルによって特徴づけられる空への拡張思考は、前掲した Hugh Kenner の「地方生産式コスモポリタニズム」と大きく反響する。というのもこの議論は、ライト兄弟の飛行機実験を神話化することから端を発しており、アメリカという国家のポジティビズムと不可分だからだ。それ故、Faulkner の『響きと怒り』を論じる際、Kenner はアメリカ南部から世界へと拡張する共同体の価値観についてしか考えられなかった。しかし Michaels と同様、Kenner もこの小説家が1930年代を代表する作家であることを見過ごしている。Faulkner は、拡張主義的なアメリカらしさの喪失を示し、その喪失に対して追悼の花輪を手向ける作家である。このことが、Kenner が示したものと別、Faulkner 的な「コスモポリタニズム」を理解する要因になるのである。しかしその理解を深めるためには、やはり彼の代表作となる次の小説を待たなくてはならないのだけれども。

第五章：“The Jim Bonds”: The Vehicle of Atlantic Modernity in *Absalom, Absalom!* (157～189)

1936年、Faulkner は『アブサロム』の出版と同時にヨクナパトーフア地図を描いた。その地図上の鉄道を見て、中上健次は「繁茂する交通機関」というメタファーで Faulkner の想像の共同体を表現したことは既に述べた通りである。しかし、その地図に注目するあまり中上が見落としていたものこそが、実は Faulkner の「繁茂する交通機関」の根幹を成すのである。それはつまり、この小説の中で無造作に言及される奴隷船、または荷物と同じように船から廃棄される名も無き奴隷たちの姿である。その姿から、大西洋における奴隷貿易の歴史が一瞬の、しかし強烈な光を放つ。Ian Baucom は、Zong 号という奴隷船の奴隷商人が保険金欲しさに奴隷たちを海に生きたまま捨てた1781年の痛ましい事件から、大西洋に眠る声なき声の証言を掘り起こそうとした。奴隷貿易をめぐる投機ビジネスは、Baucom にとって「長い19世紀」を意識させ、グローバルな資本主義社会の原型を成すものである。Zong 号の亡霊が資本主義の世界に憑依している、と Marx や Engels なら述べるだろう。

そして、その亡霊は Faulkner の想像の共同体にも憑依している。例えば Rosa Coldfield は他の語り手と同様に推測を交えながら自らと Sutpen 家との関わりを回想するのであるが、その際、彼女によって不意に言及される蒸気船から「過剰な黒人（“surplus negro”）」が廃棄されることは意義深い。ヨクナパトーフアの桂冠詩人とも形容されるこの女性の語りのスコープに、密かに Zong 号の忌まわしき記憶が宿っているのだ。Rosa が言及する「過剰な黒人」には、アメリカ南部のことを語ろうとすれば不可避免的にそこへ流入してきた他者について語らざるを得ないという地域主義のジレンマが反映されている。この論文が着目する最後の vehicle、即ち名も無き奴隷船は、推測に基づく近代的投機ビジネスの長い歴史

を含意しながら、同様に複数の語り手達の推測によって構成される **Sutpen** 家の物語を特徴づけるのである。そしてどの語り手の推測も、それがアメリカ南部へと志向するものである以上、大西洋の記憶へとスライドせざるを得ない。そうした語りの領域に関するズレは、**Rosa** の「過剰な黒人」という言葉の様に、まるで語り手が口を滑らせたかのような些細な形式で、不意に表現されている。

語り手が自らの語りの範囲の流動性をまるで口を滑らせたかの様に告白する物語形式では、アメリカ南部の価値観は中和される。**Thomas** は自らの白人性によってヨクナパトーフで大地主の地位を獲得するので、一家が抱える他人種の血を許容することができない。**Charles Bon** は彼にとって決して認知できない混血の息子であるのだが、物語のクライマックスでは **Thomas** のもう一人の息子（純血の白人である）**Henry Sutpen** によって射殺される。この悲劇は、自ら手を下しはしないが、**Thomas** によってお膳立てされたものだ。結局、**Thomas** と **Charles** とが親子らしい関わりを示すことは物語上一度もない。しかし語り手の推測で構成されたこの物語の中では、彼らが紛れもない親子として繋がるための表現が散りばめられている。その表現とは、人種主義的な価値観や法的な書類によるものではなく、彼ら親子の口許から不意に現れる「微笑みともつかない表情（“an expression almost of smiling”）」である。アメリカ南部の社会構造上では人種的に分断されてしまう親子が、共通の微笑みを通じて、ないしはその表現についての推測を通じて繋がることことができる。**Charles** は父親みたいに微笑む——それは言葉にならない比喻表現であるが故に、その曖昧さ故に、アメリカ南部の人種主義的な歴史や言語を超えて二人を繋げることができる。こうした想像上の連帯、現状に於いては達成不可能な願いについて表現することは、文学にのみ許容された特権であると言えよう。**Faulkner** はその特権を、彼の故郷について語るためだけでなく、その地域主義を一時的に解体するためにも行使しているのである。

以上の様な曖昧な物語形式によって、アメリカ南部の「血」や「地」から、大西洋へと **Faulkner** の視野が拡大する。その形式は、推測によって駆動した奴隷貿易の投機ビジネスによって特徴づけられる形式、大西洋をめぐる近代性の物語形式である。この形式によってアメリカ南部の奴隷制の記憶と世界規模の奴隷貿易の記憶が繋がる時、交通機関、そして比喻表現としての **vehicle** が織りなす想像の共同体が完成する——「ローカル」と「グローバル」の両価性を提示しながら。

Conclusion (190~205)

Faulkner なりのコスモポリタニズムは、現代に生きる我々自身のコスモポリタニズムを再考するための重要なイメージを提供する。*Up in the Air* (2008) という映画の中で、**Natalie Keener** という新入社員が「グローカル (glocal)」という言葉を導入するシーンがある。彼女は解雇代理業を行う会社に所属しているのだが、この業務に関わる飛行機の莫大な交通費を削減するために、長距離移動を止めインターネットを通じて解雇を行うことを提案するのである。そこで彼女が示す様に、「ローカル」かつ「グローバル」な価値観を得ること

は、今日のメディア環境を鑑みれば難しいことではない。Marshall McLuhan がかつてグローバル・ビレッジという言葉で表現した空間（電気メディアによるコミュニケーションによって超圧縮した時空間）は、Facebook などウェブ上のコミュニティによって既に具現化された。遠い所にいる無関係の人間によって自分の運命が左右される社会を描く *Up in the Air*——この作品に見つかる「グローカル」という言葉は、グローバル・ビレッジと部分的には同義だろう。「部分的には」というのは、同作品の中では Natalie による「グローカル」な提案は実現されず、むしろそうした両価的な空間の狭間に宙づり状態で放り出される主人公 Ryan Bingham の悲哀が中心的なテーマとなっているからだ。日本では『マイレージ・マイライフ』という邦題で公開された事実が示す通り、この物語は飛行機での旅そのものが人生であるというデラシネ的人間存在を主題としているのである。この物語が示す現代性は、「繁茂する交通機関」を基盤に Faulkner 作品における登場人物たちの存在不安を読み解いてきた本論文にとって、決して無関係ではない。

本論文の最後に論じた *Absalom, Absalom!* において、Rosa Coldfield という登場人物が自らの少女だった頃を回顧するとき、当時の自分を「丸められた（“globed”）」根、つまり球根に喩える。彼女は、幼い頃にヴァージニアから旅に出て、後に悪魔と罵ることになる夫 Thomas Sutpen の居るヨクナパトーフア郡はサトペン荘園へとその根を下ろす。移動と定住の概念がローザの「グローブド」という言葉に集約されているのであるが、この概念は「グローカル」へと向かう現代的な存在論にとっても示唆的だ。「ローカル」と「グローバル」との間を瞬間移動させる複合語「グローカル」に対し、「グローブド」という概念は移動のプロセス（結果ではなく）を強調している。この言葉を通じて Faulkner は、ローカルなものとグローバルなものを共に視野に入れながらも、それらを例えば「グローカル」のように、強引に融合させはしないという慎重かつ柔軟な態度を示している。

Faulkner の場合は、ジム・クロウ法によって人種分離政策が浸透した南部が徐々に変化していく 1950 年代以降に、この態度がより鮮明になる。黒人と白人とが同じ教育機関で学ぶようになるころ、彼は最も保守的な南部人の一人だった。普遍的な人道主義という観点を持ちながらも、南部でそれが適応されることには慎重だったのである。このことを偽善と断定するのは簡単であるが、人種主義的なアメリカ南部に根差す文化アイデンティティとその喪失を描く Faulkner にとって、ローカルな価値観とグローバルな価値観は、繋がりながらも簡単には融合できないものであることも考慮しなくてはならない。この困難は、Harvey の地理学的コスモポリタニズムにとっても不可避免な問題となり、即時的にローカルかつグローバルな存在と意識され得る現在の我々の存在論を再考するための重要な課題ともなるだろう。しかし本論文にとってより重要なことは、Faulkner という作家が、言語とは本質的には定義不可能なものであるというルールの下で行われる言語ゲームの卓越したプレイヤー（“player”）であると同時に（このことは登場人物の声と連動する「繁茂する交通機関」の機能によって具現化されている）、そうした言語の定義不可能性を通じて、近代史に堆積する人種主義的な歴史の克服を願うプレイヤー（“prayer”）でもあるというこ

とだ。アメリカ南部における記憶と忘却の可能性を自らの言語に投影させながら、この作家は我々読者に地域的な価値観と普遍的な価値観との交渉を絶えず促しているのである。

以上、本論文はヨクナパトーフアの生成からその地図の作成に至るまでに出版された 5 つの小説を取り扱うが、この構成から止むを得ず排除してしまった作品——例えば 1930 年の『死の床に横たわりて (*As I Lay Dying*)』や『サンクチュアリ (*Sanctuary*)』など——も忘れてはならないだろう。しかしそれらについては、「繁茂する交通機関」という本論文の焦点が、その排除をいくらか正当化するはずだ。様々な交通機関を提示してきた 5 つの小説は、お互いの欠落を補い合いながら、**Faulkner** が「コスモス」と呼んだアメリカ南部と、その場所に内在するコスモポリタニズムの可能性を示している。彼の「コスモス」とはつまり、「ローカル」と「グローバル」との間を絶えず振動するイメージであり、同時にデラシネ的な人間の存在不安を喚起させる物語形式でもある。アメリカ南部を描く **Faulkner** の言語は、そうした存在不安を表現せざるを得ないのであるが、その存在の根拠を「血」と「地」に求めれば、閉鎖した社会空間を描写したことにしかならないだろう。しかし **vehicle** にその存在の意味と位置を託せば、その曖昧さと可動性故に、彼らの存在はより広範な地域へと、他者へと、移動していく——様々な場所に在るデラシネの記憶を、その存在不安を、繋ぎ合わせて。その過程で、地域から世界を、世界から地域を見つめ直すために常に移動する主体位置が生成される。この様な仕方、存在不安に満ちた人間の間を移動し接続する **vehicle** を通じて、**Faulkner** の「コスモス」は「コスモポリタニズム」へと昇華されるのである。